



解らないことだらけの放射線被ばく 医療被ばく専門家である診療放射線技師が答える

日本診療放射線技師会 編



放射線被ばくにはリスクを伴う。人体に放射線を合法的に照射できるのは、それ以上の便益があることが明らかな診療行為のみに限られ、医師・歯科医師のほかは診療放射線技師だけが行うことができる。本書は、その職能団体である日本診療

放射線技師会が、東日本大震災及び東京電力(株)福島第一原子力発電所事故以降に行ってきた放射線被ばく相談事業の一部をQ&Aとしてまとめたものである。

本書には、患者さんからの質問(合計46問)とそれに対する答え、解説及びコメントが一問一答形式で見開き2ページごとにまとめられている。福島第一原発事故の被ばくに関するQ&Aだけではなく、医療による被ばく(低線量放射線の健康影響)、放射線被ばくの基礎知識についても各章ごとに分類されている。質問には、「放射線は移る?」、「X線室は常に放射線が飛び交っている?」といった素朴な疑問の範疇に含まれるものから、「放射線の単位の違いが分からない」、「内部被ばくとは?」などの基礎的な質問や、「預託実効線量とは?」、「防護の最適化とは?」などのやや専門的な質問までカバーされている。これは、患者さんが持つ放射線の知識のレベルが幅広いことを反映しており、回答する診

療放射線技師さんも分かりやすく回答することに苦心したことと思われる。

医療による被ばくがまとめられている第2章では、「妊娠中に受けた放射線検査による胎児への影響は?」、「放射線検査による子供への影響は?」、「検査で子供の将来に悪影響が出ないか?」といった妊娠時や子供への影響に関する質問が多い。筆者の娘も0歳の頃から、CTやX線検査による医療被ばくを幾度となく受けてきた。冒頭に述べたように、リスク以上の便益がある診療行為とはいえ、親にとって子供の放射線被ばくは強い関心事項である。

日本診療放射線技師会による緊急被ばくスクリーニング活動として、2011年3月16~31日まで1日ごとの記録が掲載されているのは特筆すべきことと思われる。福島第一原発事故直後のスクリーニングの状況は、かつては福島県災害対策本部のホームページにおいて各日ごとに公表されていたが、現在は月ごとの累計しか示されていない。各団体が行った緊急被ばくスクリーニング活動の結果は、最近になって徐々に学術論文等でも公表されつつあるが、一般向けの書籍にも広く残しておくことは重要と思われる。なお、日本診療放射線技師会による福島第一原発事故への取り組みについては、同会のwebページに中間報告書がまとめられている(http://www.jart.jp/activity/tclj8k000000014r-att/report_20110611.pdf)。

本書は“患者さんからの目線に立って”とカバーに書かれているように、正しい知識が一般向けに非常に分かりやすくかつ簡潔にまとめられている。日常的に放射線を利用している本誌の読者の多くは、本書に収録されている質問の多くに正しく答えることができるであろう。知識を再確認する観点から再教育資料として活用できる書籍である。また、放射線に関する疑問を持つ一般の方が周囲におられる際には一読を薦めることができる書籍である。

(松垣正吾 東京大学アイソトープ総合センター)

(ISBN978-4-86003-434-4, A5判 104頁, 定価本体1,500円, 医療科学社, ☎03-3818-9821, 2013年)